



第二二四号 令和六年五月十五日（水）発行

令和五年度総会開催される

一筆啓上・作左の会総会が、去る四月十四日（日）六ツ美西部学区こどもの家で開催されました。

総会では市川会長の挨拶に続き、令和五年度の事業報告及び決算報告などすべての議案が満場一致で議決されました。

役員の変更では、会長には引き続き市川真人氏、副会長に野田光宏氏、そしてもう一人の副会長の西島忠夫氏は退任され、新たに赤渋五区総代の渡邊政彦氏、会計の柵木喜幸氏が退任され、宮地西総代熊代秀人氏が新体制として承認されました。

会長の挨拶では、一筆啓上・作

左の会も本年で二十五周年を迎え、当時の学区総代会の方々の想いを胸に、いかに地域の絆を深めることが出来るかを思い活動をしてまいりました。通年事業として「ふるさと賞の実施」、「作左通信の発行」等々予定していた行事を滞りなく実施出来たことに感謝の意を述べられました。来賓には、衆議院議員 青山周平様（代理：奥様）、愛知県議会議員 新海正春様、岡崎市議会議員 廣重敦様はじめ多くの方々にご臨席を賜り祝辞を頂きました。

引き続きの講演会では、講師に、おかげさき塾歴史教室主宰の市橋章男氏をお招きし、「『大坂の陣、その顛末』〜天下静謐へ家康公の覚悟とは〜」をテーマにご講演を頂きました。

次年度についても活動を続ける中で、昨年度と同様に新聞各社、メディアを活用すると共に会員の皆様方のお知恵をお借りしながら、各イベントを通して相互の交流が図られるよう、また「一筆啓上・作左の会」が継続的に発展して地域に根差して行く活動をして参ります。

*講演会内容の詳細については、「作左の会」ホームページに掲載してありますので是非ご覧ください。



作左の会

検索



市橋章男氏の講演会風景



総会会場風景

「大坂の陣、その顛末」

天下静謐への家康公の覚悟とは

講師 市橋 章男 氏

「大坂夏の陣 屏風」に描かれた戦いの悲惨さ

◆講師プロフィール〔略歴〕

1954年岡崎市生まれ。國學院大學で史学を専攻。教職員退職後、ふるさと岡崎にかかわる歴史・人物の著作活動を始める。
 2005年、岡崎長善館で「おかざき塾歴史教室」を主宰開講。2019年、全国歴史研究会特別功労賞受賞。新編岡崎市史調査員、前二松学舎大学大学院研究員。全国歴史研究会特別会員、ケーブルテレビミクス放送審議委員長、現在は「岡崎ふるさと歴史教室」主催。NHK文化センター講師。



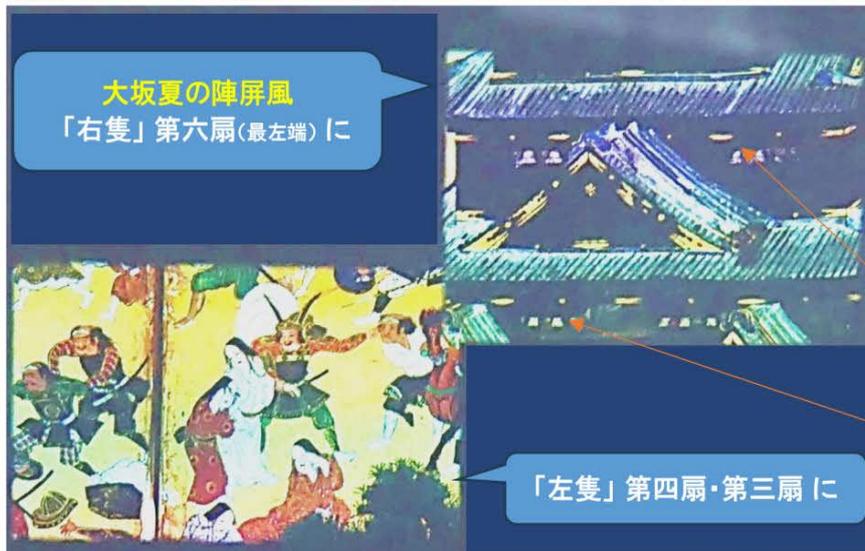
〇昨年は、NHKの「どうする家康」で盛り上がりましたが、私も関わっていました。脚本部のディレクターが来て“2、3問聞きたい”と。実際には2、3冊くらいいろいろ聞かれました。10月中旬まででしたが大変でした。脚本を作るためですが、自分が書いたものが使われたところもあります。言ったことと違う脚本のこともありましたが、しかし、「作左」が登場しなかったのは非常に残念でした。浜松城でも岡崎城でも作左がしっかりしていて万端の備えをしていたから、簡単にはとられない城だと家康も安心して戦いができたのに、わかってもらえてない。



「戦国の終焉」… 混乱する極楽橋付近。大坂城内から脱出する人々、背負われる高貴な女性、鎧を脱ぎ捨てる武士。

大坂夏の陣屏風（黒田屏風）… 1615年(慶長20)に起きた大坂夏の陣の様子を描いた屏風絵。戦国時代最後の戦いの激烈さと戦災の悲惨さが迫真の描写で描かれている。六曲一双。六曲一双(ろっきょくいっそう)=六枚に折りたたむことのできる屏風2隻。屏風を数える単位が「隻」。向かって右が右隻(うせき)。左が左隻(させき)。二隻一組の対(つい)が「双」。折りたたんだ時の面を数える単位が「曲」。面は右から左へ第一扇～第六扇という。上図は「左隻・第一扇」中段に描かれている。

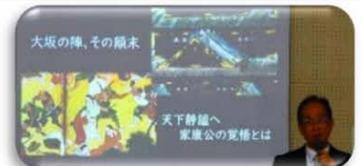
家康は、なぜ豊臣を滅ぼさなければいけなかったのか？



大坂夏の陣屏風
「右隻」第六扇(最左端)に

「左隻」第四扇・第三扇に

「対」で見ると、大坂城は画面中央に描かれている(右隻5扇目から左隻1扇目)大坂城を中心にして、右から左へ合戦が推移するような構成になっている。



◆大坂の陣は2回あります。最初の冬の陣は和睦で終わり、夏の陣は豊臣の滅びる戦いです。この絵は「大坂夏の陣屏風」の中の絵です。右は、天守閣を大きくしてありますが大坂城です。見えるでしょうか、天守の窓から女官たちが不安そうな顔で戦の状況を見えています。

この屏風絵は、こんな様子まで細かく描いているんです。



作左の会

検索

← 続き(本文)はホームページをご覧ください。